

## 《Spiral の会》の歩み

— ボランティア活動15年の記録 —

### *15 Years of My Community Service*

石原 敏子  
Toshi ISHIHARA

The author started volunteer work in 1995 after the Great Earthquake attacked the Awaji Island and Hanshin Area. She was one of the millions of victims. Thanks to the people around her, she could survive the aftermath of the disaster. In order to show gratitude to the help she received, she decided to involve herself in community service by utilizing her career of teaching and providing people with a chance to enjoy literature. The “Spiral” group, named after her upward aspiration, has held more than 50 meetings so far over the period of 15 years, and is still on its way. In total, more than 1,000 people have attended the meeting and enriched their life through literature.

#### 1 経緯

1995年1月17日未明、大地震が阪神・淡路島を襲った。神戸市灘区に在住していたわたしは、被災者の一人となった。幸い、家屋には大きな被害はなく、家財道具が散乱する程度であった。しかし、かつて経験したことのない揺れとその後の余震のなか、窓から見渡す神戸の町の家々やビルに次つぎと上がる火の手、そして被害状況を伝える報道から、私は完全なパニックに陥ってしまった。母と二人ではこの状況に耐えられず、近くに住む友人宅に非難させてもらうことにした。余震に脅えながら、先になが待ち受けているかわからず、一晩中からだが震えて止まらなかった。

翌朝、この知人の親戚の方の車に乗せてもらい、十二時間かけて西宮北口へ移動。その駅の周辺は地震の影響を大きく受けなかったようで、普段の生活が営まれていた。ネオンサインがこうこうと輝き、コンビニエンス・ストアも映画館も開いている。神戸では、この瞬間何千人の人が瓦礫の下であえいでいる、また今晚寝る場所もない、水もトイレも使えないという状態なのに、数十キロ離れた地域では、地震があったことも人々の意識にはないかのような生活ぶ

りで、被害者とそうでない者との間の違いを強く感じた。わたしは、この安全な世界からは疎外されたと感じざるをえなかった。

こうして、姉のいる京都へ脱出した。その後、もう一人の姉が住む静岡に移り、神戸のマンションに水が出るようになるまで、そこに留まることになった。仕事には、新幹線を通った。関西に近づくにつれ、地震の恐怖が思い出され、少しの揺れもちよとした音も怖かった。くり返し襲ってくる恐怖と闘う日々だった。再び家に戻ったとき、大地震の日に倒れそのままに放っておかれた(地震のときには、もちろん気づいていなかった)クロッカスが、うす緑の細い茎を伸ばしていた。生命が続いていた。もう三月だった。

この二ヶ月半におよぶ静岡での滞在中、いろいろな方々のお世話になった。特に、以前から英語の本を読む勉強会を開いていた姉の仲間たちに、文学に関する話しをするようにと招かれたときのことが、もっとも強い印象として残っている。というのも、自分が学んできたことを伝えることによって人々に刺激や楽しみを与えられるということが、わたしにとってはいかに大きな喜びであるかということ、このとき再認識したからである。文学作品を読むことを機会に人々が集い、共に考える時間を持つことの大切さを心から感じるようになった。お世話になった方々へのお礼の方法がそれまでわからないでいたが、伝えるという素晴らしいやりかたがあると気づき、勉強したいが機会に恵まれなかった人々のためにもなんらかの役割を果たすことができるのではと考え、勉強会を開こうと決意した。早速、当時さまざまなボランティアの催しを開いておられた「カイロスの会」に相談し、初めての勉強会を開いた。小さな本屋さんでの、ささやかな会であった。これが、第0回目の会合となった。

神戸・淡路大震災は、「ボランティア元年」とよく言われるが、私の小さなボランティアの始まりもここにあった、ということができる。その後も継続することを希望し、「スパイラルの会」を作り、勉強会を続けていくことにした。回り道をしながらも上昇し続けられるように、との願いを込めての命名であった。回ごとにいただく一人2000円の会費は、会場費・通信費などの経費をのぞきすべてを、神戸市にある身障者の活動を補助するNGOの団体に寄付することにした。その後、ときどきは別の団体に寄付することもあったが、主にこの団体を10年間継続的に支持し続けることになった。

その後、アフガニスタンで灌漑事業を行っている団体や、視覚障害者の施設、フィリピンで孤児の世話をしておられるシスター、海外の戦争地で医療活動をする医師など、その時々に必要なと思われる方々へ寄付してきている。2010年3月でスパイラルの回は50回目を迎え、参加者はのべ1000人を超え、寄付も200万円は超えたことであろう。金額の問題ではないと思い、計算する事はやめた。わたしが負担する交通費や経費を考えれば、それをそのまま寄付してもかなりの額になったかもしれないが、それでは参加してくれる方々との協働は生まれて来ない。これだけ多くの人々が学び、楽しみ、そして他の人のことをやさしく考えているということが素晴らしく、それが原動力となって私を動かしている。そのことが大切であると思う。

いつも手作りのお菓子を用意してくださる方もいる。重い絵本を運んでくださる方がいる。家までごみをもって帰ってくださる方もいる。本当に優しい人たちに囲まれているという幸せが私を包む。

## 2 50回開催までの15年間で印象深かったこと

1) 1999年2月に開催予定をしていた数日前に、子宮がんで手術が必要であることを知らされ、急遽、会をキャンセルしなければならなかったことを思い出す。そのときは、日程を変更し、静岡市主催の翻訳コンテストの優勝者で、当時静岡に在住されていたイアン・マクドナルドさんに、翻訳のお話をしていただいたことがあった。突然のお願いをこころよく引き受けてくださり、感謝でした。

また、21回目阿倍哲三先生（かつてノートルダム女子大学で姉がフランス語を教えていただいた先生）、25回目コージン・サカモト先生（筆者の大学の同僚であり、英語ハイクで著名な先生）にも、お忙しいなか無理をお願いしたが、快くお引き受けいただいた。ほんとうに、ありがとうございました。

2) 会が常習化してつまらなくなっているのではと思い、20回目で閉会を申し出たが、参加者から続行するようにと声をかけられ、かえって元気をいただくことがあった。30回目にも、同じことを申し出たが、このときも強い支持を得ることになった。参加者の入れ替わり（最近では、親の介護で来られないという人が多いことに驚かされる）、増加・減少はあるものの、50回まで続けてこられたのは、参加者の熱意のおかげである。

3) 46回目が開かれた2008年7月18日は、心の動揺が隠せない日だった。翌週に精密検査を受け、大腸がんを患っていることを知らされることになるが、その病気の影響のため、当日は最悪の体調であった。アンデルセンの童話を読み、絵本を紹介している間も、わたしのころは、どこか遠くを浮遊しているようであった。その後、手術・療養と続いたが、前回の入院のときと同様に、スパイラルの会の方々から、待っているという励ましの言葉をいただいた。それがどれだけの力をわたしに与えてくれていたことであろう。この二回の病気は、お互いが助け合っていることを実感するよい経験であったと考える。

4) 15年間をとおして、自分に関心があり、皆さんに読んで欲しいと思うストーリーやエッセイなどを選んできた。扱ったものを表にして見ると、私の研究の流れが見えるのが興味深い。

アジア系アメリカ文学から、英米の短編小説、また、20回目は、ちょうど20世紀最後の年になったので、新世紀には“A Brave New World”をめざそうと、Shakespeareの*The Tempest*

に挑戦した。その後、25回目ぐらいからは、児童文学に注意が向いている。

実は、上記の1999年のガン闘病以降、それまでの研究対象に取り組みなくなったという経緯がある。その理由はいくつか考えられが、一番の理由は、生理的に読めなくなったということである。アメリカ社会における移民の生活を反映する作品が、いつも明るい側面を描くばかりでないことは明らかであろう。そうした人々の苦難を擬似的に再体験することを、わたしの体が受け付けなくなっていったというのが本音である。アジア系アメリカ文学は新しく進出してきた分野であり、その全体像を捉えるためには、たくさんの作品を読み整理していく作業が必要であった。まさに、それは、わたしにとって「作業」であり、ときには、苦しい読書体験さえあった。それが、病気を転機に、無理を強いるのではなく、自分が読みたいものを読むという姿勢になり、それをおし進める勇気が持てたということである。

地震がもたらした大きな影響は、わたしの研究姿勢の見直しという形でも現れた。それまで自分が行ってきた文学作品批評は、単なる言葉の上での操作にすぎなかったことに気づかされることになった。それは、上記したように、地震直後我が家のリビングルームから見えていた光景——次々とビルディングをのみこんでいく火の手、そして長田の町を焼き尽くした、猛威を振るい続けた火事——がきっかけとなっている。それまでにわたしは、ある中国系アメリカ人作家の作品に関してステレオタイプの問題を考察する論文において、新しい世界観に到達するためには過去の因習から解放される必要があるとし、その作品に用いられていた図書館が焼け落ちる場面に着目し、その重要性を強調していた。それは比喩表現にしかすぎなかったとはいえ、現実には目の前に火事で多くの人々のいのちが奪われていくのに、何もすることができない自分の無力さを強く感じ、自分の取り組み方について再考を迫られることになった。そして、その延長線上に、絵本・児童文学の実験的な効果を基本とした今日の研究姿勢がある。

スパイラルの会で扱う作品が児童文学へと方向変換し始めたころは、題材選択の傾向が変わったことに戸惑われた参加者もおられた。しかし、最近では、児童文学を再発見し、その魅力に取り付かれている方々も少なくない。孫との対話に役立つとの声も聞く。別の方からは、大学生のお嬢さんと同じ本を読み話し合う機会が持てて幸せです、と聞かせて頂いた。病気が私を変え、まわりの人たちにも変化をもたらしていることが実感される。題材選択に対する責任を感じ、身のひきしまる思いがする。

### 3 これから

スパイラルの会を、これからももう少しは続けていくつもりである。現に、2010年6月24日に51回目を開催し、Ellen Raskinの*The Westing Game*を読み、彼女の絵本も紹介し、小説との関連性を指摘した。新しい方の参加もあり、人々の動きを感じる。Ellen Raskinの絵には、2008年7月大腸がんと診断される直前に訪れた安曇野のちひろ美術館で出会った。そのとき

《Spiralの会》の歩み（石原）

別々に観覧していた母と、展示の中でそれぞれが一番気に入った絵として二人が挙げたのが Raskin のものであった。

これからも、家族との絆を大切に、参加される方々のそれぞれの思いをつなぎながら、外の世界へとところを開いていきたいと考えている。そして、横のつながりが縦にもつながっていくよう努力していきたい。

皆様方のご支持に心から感謝し、今後ともご支援賜りますようお願いいたします。

0	1995-7	(カイロス主催) アジア系アメリカ文学をたずねて
1	1995-9-30	アジア系アメリカ文学をたずねて – Bharati Mukherjee, <i>The Holder of the World</i> を読む (1) –
2	1996-2-20	アジア系アメリカ文学をたずねて – Bharati Mukherjee, <i>The Holder of the World</i> を読む (2) –
3	1996-6-20	Bobbie Ann Mason, “Shilo” を読む
4	1996-11-21	Anita Desai, “Games at Twilight” を読む
5	1997-2-20	Hisaye Yamamoto, “Seventeen Syllables,” “Yoneko’s Earthquake”
6	1997-5-19	Karen Tei Yamashita, <i>Through the Arc of the Rain Forest</i> (1)
7	1997-7-14	Karen Tei Yamashita, <i>Through the Arc of the Rain Forest</i> (2)
8	1997-9-16	R. K. Narayan, “House Opposite,” “Fellow Feeling”
9	1997-12-8	“What Do You Have in Your ‘Box’? – Discovering Yourself with Toshi –” (『英訳百人一首』を用いて英語短歌の実作)
10	1998-2-16	日系アメリカ文学を読む (1) 日系 2 世 Yoshiko Uchida, “Of Dry Goods and Black Bow Ties” Mitsue Yamada, “Guilty on Both Counts” Wakako Yamauchi, “The Handkerchief” Toshio Mori, “Say It with Flowers”
11	1998-6-5	日系アメリカ文学を読む (2) 日系 3 世 Janice Mirikitani, “Suicide Note” Garrett K. Hongo, “The Pier” Cynthia Kadohata, “Charlie-O” David M. Masumoto, “Firedance” Susan Nune, “A Small Obligation and Other Stories of Hilo”
12	1998-9-21	“Family” (1) Grace Paley, “Mother” Anna Quindlen, “Sibling Rivalry”

13	1998-11-24	<p>“Family” (2)</p> <p>Doris Lessing, “My Father”</p> <p>Katherine Anne Porter, “The Necessary Enemy”</p> <p>Cynthia Ozick, “The Seam of Snail”</p>
14	1999-6	イアン・マクドナルド先生による講演
15	1999-9-14	<p>“Family” (3)</p> <p>Michael Dorris, “A Second Adoption”</p> <p>Louise Erdlich, “Foreword from <i>The Broken Cord</i>”</p>
16	1999-11-22	<p>“Family” (4)</p> <p>William Butler Yeats, “Reveries over Childhood and Youth”</p> <p>Barry Lopez, “Searching for Ancestors”</p>
17	2000-1-17	<p><i>Mini-Fiction</i> (1)</p> <p>Alice Walker, “The Flowers”</p> <p>Alturo Vivante, “Can-Can”</p> <p>Raymond Carver, “The Father”</p> <p>Richard Brautigan, “Corporal”</p>
18	2000-5-22	<p><i>Mini-Fiction</i> (2)</p> <p>Raymond Carver, “The Idea,” “Night School,” “The Ducks,” “Signals,” “What Do You Do in San Francisco?”</p>
19	2000-9-18	Paddy Chayefsky, <i>Marty</i>
20	2000-12-11	William Shakespeare, <i>The Tempest</i>
21	2001-2-26	阿部哲三先生にお話いただきました
22	2001-6-9	William Shakespeare, “The Sonnets,” 33, 34, 35
23	2001-9-14	Virginia Woolf, “The Death of the Moth,” “The Legacy”
24	2002-1-30	Virginia Woolf, “Professions for Women,” “Kew Garden”
25	2002-3-15	コージン・サカモト先生にお話いただきました
26	2002-5-25	<p>児童文学を通して見るアメリカ (1)</p> <p>Yoshiko Uchida, “Letter from a Concentration Camp”</p> <p>Ryan Oba, “Home Now”</p> <p>Picture books on Asian Americans</p> <p>Picture books on Native Americans</p>
27	2002-9-14	<p>児童文学を通して見るアメリカ (2)</p> <p>Beverly Cleary, <i>Dear Mr. Henshaw</i></p> <p>Picture books on African Americans</p>

《Spiral の会》の歩み (石原)

		Poems by Langston Hughes
28	2003-1-18	児童文学を通して見るアメリカ (3) Christopher Paul Curtis, <i>Bud, Not Buddy</i>
29	2003-5-17	Audrey Coulombis, <i>Getting Near to Baby</i> Paul Fleischman, <i>Joyful Noise</i>
30	2003-9-13	Lewis Carroll, <i>Alice's Adventures in Wonderland</i> <i>Through the Looking Glass</i>
31	2004-1-31	C. S. Lewis, <i>The Lion, the Witch and the Wardrobe</i>
32	2004-5-15	Paul Fleischman, <i>Seedfolks</i> , and <i>The Whirligig</i>
33	2004-9-11	K. M. Peyton, <i>A Pattern of Roses</i>
34	2005-1-29	Louis Sachar, <i>Holes</i>
35	2005-3-26	Ernest Hemmingway, "Old Man at the Bridge" Frederick Brown, "The Weapon"
36	2005-6-18	Sharon Creech, <i>The Wanderer</i>
37	2005-9-21	E. L. Konigsburg, <i>From the Mixed-Up Files of Mrs. Frankweiler</i>
38	2006-1-28	E. L. Konigsburg, <i>The View from Saturday</i>
39	2006-5-22	Witi Ihimaera, <i>The Whale Rider</i>
40	2006-9-19	Antoine de Saint-Exupéry, <i>The Little Prince</i>
41	2007-1-27	Linda Sue Park, <i>A Single Shard</i>
42	2007-5-26	David Weisner, <i>Black and White</i>
43	2007-9-15	Richard Malby Jr., <i>Miss Potter</i>
44	2008-1-19	Benjamin Hoff, <i>The Tao of Pooh</i>
45	2008-5-10	Frances Hodgson Burnett, <i>The Secret Garden</i>
46	2008-7-18	Christian Hans Andersen's stories, and picturebooks based on his stories
47	2009-2-28	Kenneth Grahame, <i>The Wind in the Willows</i>
48	2009-6-20	Alison Uttley, <i>A Traveller in Time</i>
49	2009-10-17	Philippa Pearce, <i>Tom's Midnight Garden</i>
50	2010-3-20	Michael Ende, <i>Momo</i>
51	2011-6-24	Ellen Raskin, <i>The Westing Game</i>